

歴史散策パンフレット



令和6年度 ふるさと体験塾の様子

製作:さつまガイド
協力:さつま町教育委員会
紫尾区公民会
鹿児島銀行地域支援部

紫尾山と紫尾神社

紫尾山は鹿児島県薩摩郡さつま町の北西部にある山で、標高は1067mです。紫尾山の名前の由来は、秦の始皇帝の命で不老不死の霊薬を求めた徐福が紫の紐を忘れたという伝説が残されています。また社殿の下から温泉が湧き出ており「神の湯」と呼ばれていました。延喜元年(901)に成立した「日本三代実録」には、貞観8年(866)紫美(紫尾)神に従五位下の官位を授けたという記録があります。現在の紫尾神社の祭神は瓊瓊杵尊、彦火火出尊、鵜茅萱不敢尊です。江戸時代には宮之城島津家第4代当主島津久通が紫尾神社に参拝し、お告げにより永野金山を発見したとされています。紫尾神社は古くから祈答院七ヶ郷(山崎、大村、黒木、佐志、藺牟田、宮之城、鶴田)の総社として信仰されてきました。藩政時代は島津氏、明治時代には県社として祭典が営まれ繁栄してきました。



現在の紫尾神社社殿



紫尾神社古写真(時期不明)

紫尾神社周辺の史跡 1

1 経塚

紫尾神社の駐車場脇の土手にある石塔です。経塚は平安時代末期にやがて来る末法の世に仏の救いを得るために勝地と呼ばれる場所に経典などを入れた筒などを埋納するものでした。いつごろのものかは不明です。



経塚(紫尾神社駐車場付近)

2 六地藏塔



紫尾神社の池



六地藏塔



六地藏塔に刻まれた銘文

この六地藏塔は紫尾神社の池の近くに立っています。文安2年(1445)の銘が彫られています。六地藏塔は死後六道と呼ばれる世界で苦しむ人々を救う地蔵が彫られていたものです。県内でもかなり古い六地藏です。

神興寺跡

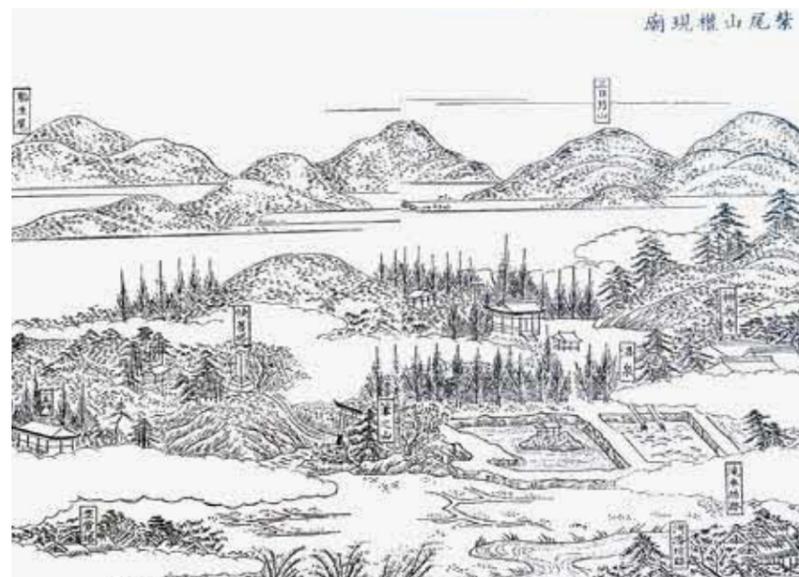
神興寺は、紫尾神社の神宮寺で現在の紫尾神社の駐車場付近にあったとされています。神興寺から仁王門までの間には15の宿坊があり、その他に瑞雲寺、徳寿庵や菩提院、奥の院などがありました。宮之城出身の画家松永南榮氏の描いた紫尾周辺の鳥瞰図にもこれらの施設が描かれています。紫尾神社境内にある鳥瞰図は松永氏のものを写したものです。



紫尾神社境内にある鳥瞰図

3 紫尾神社(紫尾三所権現)

紫尾山は別名上宮山とも呼ばれていますが、これは紫尾神社がかつて紫尾三所権現と呼ばれていた事と関連があり、紫尾山頂に上宮、紫尾神社に中宮、柏原種子田に下宮(古紫尾神社)の三つの社で祀られていたとされています。このころの祭神は伊弉冉尊、事解男命、速玉男命でした。御神体は鏡三面で承元年中鎌倉幕府の三代将軍源実朝が奉納したものと伝えられています。



三国名勝図絵に見る当時の紫尾神社周辺

4 空覚塔

紫尾神社の境内にある五輪塔です。かつては神社から100mほど離れた「伽藍所」と呼ばれる場所にありました。紫尾権現や神興寺の開祖とされている空覚上人の供養塔であり地元では「キアグドン」とも呼ばれています。



空覚塔

5 方柱石塔婆



方柱石塔婆

この方柱石塔婆は現在は紫尾神社境内西側に位置していますが江戸時代の資料「寺社巡詣録」によるともとは社殿近くに三間四方の薬師堂と阿弥陀堂を祀ったという記録がありました。その後、池の近くに倒れていたものを平成

15年(2003)の整備で現在の場所に建てたものです。それぞれの石塔には薬師如来と阿弥陀如来を表す種子梵字が刻まれています。

6 神興寺墓石塔群



神興寺の墓石塔群



芸全僧正の墓石



憲春の墓石

紫尾神社から南へ約600m下った県道右側土手の上に、神興寺の僧侶たちの墓石が並んでいます。もとは県道東側の耕地整理される前の田んぼのあたりに、西向きに立っていたとされています。最古の墓石は、応永22年(1415)の芸全僧正のもので、最大の墓石は、神興寺中興の祖である憲春の墓石で天文18年(1590)のもので、憲春は、川内新田神社の菩提寺九品寺の住職だった僧侶で、秀吉の島津攻めの際に秀吉の将兵の略奪から新田神社を守った僧侶とされています。

7 町石



町石

町石は高野山などでも建てられているのですが、一町(約109m)ごとに建てられているものです。下宮の古紫尾神社から中宮である紫尾神社神興寺までの間の約1里(約4km)の間に建てられていたようですが、現在は紫尾神社周辺に残されているのみです。町石は別名長足塔婆と呼ばれており、五輪塔と同様に地水火風空の形となっています。年号が残されたものとしては永禄6年(1563)の銘が残されています。

紫尾神社第二鳥居の礎石について

紫尾神社境内の鳥瞰図などを見ると、紫尾神社には入り口の鳥居とは別に参詣道に鳥居があったことがわかります。この鳥居の礎石は、現在も県道397号線の沿線にあります。礎石は道路拡張工事の際に周辺の石造物と共に元の場所から移動したと伝えられていますが、当時の様子を示す手がかりとなるものです。



紫尾神社第二鳥居の礎石

8 快善法印入定の碑



快善法印入定の碑

紫尾神社の北西部にある旅館「ちどり荘」の宅地内にあります。この快善法印は虎居にあった神照寺の住職でしたが、荒廃していた神興寺の住職になると石塔や石碑を掘り起こしたり、本尊の阿弥陀如来の修復などをして再興しました。快善法印は元禄14年(1701)に68歳で入定(穴の中で五穀断ちして読経し仏となること)しました。この碑は弟子たちによって建てられたものとされています。

紫尾八景について

江戸時代の紫尾について紹介している「三国名勝図会」の中にある紫尾八景は、荒廃した神興寺を再興した快善法印が元禄10年(1697)に紫尾の名所を選び「紫尾八景」に定めたものです。狩野昭信に絵を描いてもらい、諸山の僧侶が詩をつけて掛け軸を作り神興寺に納めたとされています。紫尾八景の中では「胎生山」「筆之山」「錦之尾」「両鹿勢」「三日月山」「光石」「綾織山」「陰陽師峯」などが紹介されています。



「三国名勝図絵」にある紫尾八景

石童丸物語



現在の渡良瀬橋

鎌倉時代、九州探題であった加藤左衛門尉重氏は、世の無常をはかなみ西国高野山に入り出家して刈萱道心を名乗りました。重氏の息子である石童丸は母親と共に父を訪ねてきました。しかしお山は女人禁制の



石童丸腰掛石

ため母親を麓に残し、石童丸だけが山に登りました。石童丸は父の道心と会うことができましたが、道心は父であることを名乗らず、石童丸に父親は亡くなったと告げました。石童丸が山を下ると麓で待っていた母親は「しゃく」の発作で亡くなっており、石童丸は再度山に登り道心の弟子となったと伝えられています。紫尾には石童丸物語に関連する場所である腰掛石や渡良瀬橋などがあります。また柵野の石堂山には関連すると考えられている石祠があります。

拡大図

